

特集

序文
難聴・めまい

曾根三千彦*

耳鼻咽喉科が扱う感覚器と機能は多岐に渡る。そのうち、最も小さな器官である耳には、五感の一つである聴覚を司る蝸牛と平衡感覚を司る前庭および三半規管が存在し、それぞれコミュニケーションに必要な聞こえと身体のバランスを保持する機能を発揮している。人が生活する上でのQOLに大きな影響を与える聴覚と平衡感覚であるが、加齢に伴い機能は徐々に低下していく。

最近の論文で、中年期の聴力低下に対して適切に介入をすることが認知症予防にもっとも有効的であると報告され、聴覚機能低下に対する感心が高まっている。世界保健機関が発表したワールド・レポート・オン・ヒアリング¹⁾によると、現在世界中で5人に1人が聴覚に何らかの問題を持っており、その数は2050年には4人に1人にまで増加すると予想されている。しかし、耳の病気や聞こえに問題を持っていても、その都度適切な対応をすることで自分が持っている能力を最大限に生かすことができることも強調されている。その手段として、服薬や手術、補聴器や人工内耳の装用、リハビリ、サインランゲージ、聴覚支援機器や字幕サービスなどが推奨されている。しかし諸外国に比較して本邦では、

補聴器や人工内耳の適応であっても適切な対応や援助がされておらず、その装用率が低いことが問題となっている。以前は放置される傾向にあった一側性の難聴であるが、生活や認知機能に及ぼす影響について検討が行われている。難聴が引き起こすリスクとして、認知症のほか社会的な孤立からくるうつ状態がある。診療科に関係なく、診察や指導の妨げになっている可能性がある。

平均寿命が長く超高齢社会である本邦において、いかに健康寿命を伸ばすかが大きな課題となっている。健康寿命には高齢者のフレイル対策が必要である。健康寿命に大きく影響する高齢者の転倒は、加齢に伴って生じる骨格筋量と骨格筋力低下であるサルコペニアが主な原因であるが、平衡機能の低下によるバランス障害も影響を及ぼす。サルコペニアは65歳以上の高齢者に多く、特に75歳以上になると急に増えたとされ、転倒・転落による骨折や頭部外傷が原因で介護が必要な状態になることもある。加齢による平衡障害は、耳石や前庭の感覚細胞や前庭神経、小脳の変性が原因で、ふらつき感や姿勢や歩行の不安定を生じる。平衡障害は高齢者のみの問題ではなく、若年者にも急性めまいとして発症する内耳疾患が多く存在する。ストレス社会においては、メニエール病によるめまい症状に苦悩して来院する患者も多くなっている。最近では、持続性知覚性姿勢誘発めまい(Persistent Postural Perceptual Dizziness, PPPD)という慢性的な浮遊

— Key words —

難聴, めまい, 認知症

* Michihiko Sone : 名古屋大学大学院医学系研究科 頭頸部・感覚器外科学講座 耳鼻咽喉科学 教授

感を生じる疾患が問題となっており、従来の内服加療に加えて、めまいに対するリハビリテーションの重要性も指摘されている。難聴やめまいが生じて、適切な対応をとることで人々が快適な生活を送り続けることが可能になる。

本特集では、「難聴が認知機能に及ぼす影響」について愛知医科大学の内田育恵先生、「難聴者への補聴器装用～導入と注意点～」について日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院の柘植勇人先生、「重度難聴に対する人工内耳治療」について名古屋大学の吉田忠雄先生、「大学病院におけるめまい診療の最前線」について名古屋市立大学の岩崎真一先生、「診療所におけるめまい診療の実際」についてめいほう睡眠めまいクリニックの中山明峰先生、「難聴・めまいに対する耳科手術」について藤田医科大学ばんだね病院の岡野高之先生に、執筆していただいた。

私達は機能を守る耳鼻咽喉科医として、健康長寿への挑戦をサポートする取り組みを行っている。基礎疾患以外に、難聴やめまいを併せ持つ患者も少なくない。各専門領域で該当の患者を診察された際には本特集の内容をご参考にしていただき、耳鼻咽喉科専門医の受診を勧めていただければ幸いである。

利益相反

本論文に関して、筆者に開示すべき利益相反はない。

文献

- 1) World Health Organization : World report on hearing. Geneva : 2021. 2024年8月13日閲覧
<https://www.who.int/teams/noncommunicable-diseases/sensory-functions-disability-and-rehabilitation/highlighting-priorities-for-ear-and-hearing-care>